



棋士のストイックな日常

永瀬拓矢

(将棋棋士)

「研究会の鬼」としても知られ、
「鬼軍曹」という異名をもつ永瀬拓矢王座。
将棋ファンからは、一日のほとんどを将棋の研究に
費やしているというイメージをもたれている。
はたして本当のところはどうか？
ストイックに研究に打ち込む棋士の日常を訪ねた。

将棋を覚えたのは、祖父から将棋の盤と駒を
贈ってもらったことがきっかけでした。自分の
記憶では九歳の誕生日祝いだっと思ったので
すが、小学生のときに書いた作文を読むと
実はクリスマスプレゼントでもらっていたこと
がわかりました。
九歳で将棋を覚えてプロになったのはかなり
遅いほうで、棋士になる人間としては晩年に近
い(笑)。現代ではプロになる子は四〜五歳で覚
えるのが普通です。

になって将棋が注目されたこともあり、それを
見た親御さんたちが子どもに将棋をやらせるよ
うになり、将棋がちょっとしたブームになっ
ていたころでした。奨励会試験にはそのブームの
中を勝ち抜いてきたレベルの高い子たちが多く
集まっていました。

一次試験は受験者同士がそれぞれ六局指し、
四勝すれば合格でしたが、四勝で通過できるの
は甘いと感じていました。自分は五勝一敗がい
い線だと思っています。四勝二敗で合格は甘い。
勝率六割六分七厘では私の感覚ですけど、全然
お話にならない気がします。そんなに甘い世界
ではありませんから。

奨励会試験は普通に合格しました。当時の私
の実力は同世代の中で「中の上」ぐらいだった
と思います。大勝ちもしないけど、大負けもし
ないという感じの実力だったのではないかと思
います。

なんとなく奨励会に入会したのですが、気持
ちに変化があったのは一四歳のときです。入会
から二年が経ち一級になっていましたが、そこ
から初段に入品するのに一年半かかりました。そ
のころから将棋に対する取り組みに対して自分
なりに考えるようになりました。工夫もなしに
相手が五〇やってて自分も五〇やるのではなく、

面白いゲームだったのですぐにのめり込みま
した。テレビで「NHK杯テレビ将棋トーナメ
ント」を観たり、新聞の将棋観戦記欄なども見
るようになりました。まだ幼かったですが身近
に将棋に接する媒体があったことは大きかった
気がします。観戦記を見て将棋盤に棋譜を並べ
たりしていました。子どもながらにいろいろ考
えた記憶がありますが、観戦記は大人向けに書
かれていたので、漢字が難しくて読めなかった
印象があります。観戦記には指し始め図と、終
了図の二図面が載っているのですが、それを熱
心に見て考えていたように記憶しています。

その後、カルチャーセンターに将棋の講座が
あることを知って通うようになりました。磯子
将棋センターを運営されている加山雅昭さんと
いう方が先生で、いろいろと教えていただきま
した。
一二歳のときに、なんとなくプロの養成機関
である奨励会に入りました。私の場合、奨励会
に入会する環境が整っていて、周囲の意思のよ
うなものが私の奨励会入会に向かっていた。ま
だ子どもで、まあ奨励会に入会するのも悪く
はないかなという感じで受験しましたので、な
んとなく入会したというのが本当のところす。
当時は、一九九六年に羽生善治先生が七冠王

